

歌劇「つゆ」台本

原作：三遊亭円朝

時：江戸時代 梅の花が咲く頃

所：江戸柳島の旗本飯島平左衛門の別荘

舞台想定＝臥竜梅が満開に咲き誇る垂れ幕。

登場人物

つゆ＝藤村昌子 飯島左衛門の娘。

よね＝大沢滋美 つゆに忠義な女中。

萩原新三郎＝橋本和明 浪人、根津の清水谷で田畑や貸長屋のあがりほうかんで生計を立てている。

山本志丈＝柰子淳 飯島家出入の漢方医 金持のご機嫌とりで暮らす幫間医者。新三郎の友人。

想定した楽器編成

木管四重奏 Fl. Ob. Cl. Fg. 弦楽四重奏 Vn.1 Vn.2 Vla. Vc. ハープ ピアノ各 1

第一幕 飯島左衛門の別邸 梅の花が満開の庭先。

(臥龍梅がろうばいで梅見をした帰りの新三郎と志丈が下手より登場)

新三郎 俳句「煙草にはマッチがうまい梅の中」

志丈 おお! いい俳句ですね。「たばこはマッチで飲むと美味い」ですか。感服感服。

僕は横着ですから、横着して俳句をよみますと、「梅を褒めな、紛らわしいよ門違い」としか詠めませんよ。ハハハ。

新三郎 臥龍梅の梅はきれいでしたね。

志丈 梅を見るのもいいですが、梅の花は動かないし口もききませんよ。僕など助平だから、余程女の方がいい。これから、飯島様の別荘にいきましょう。きれいなお嬢様とやさしい女中さんがいるだけです。(新三郎を振り返って) ここです。ごめん下さ〜い。

よね はい。どなたですか? おや志丈様、しばらくでございます。

志丈 お米さん。ご無沙汰してます。

お米 しばらくお見えになりませんので、どうされたかと、お噂をしておりました。

今日は、又どちらへお出かけでしたか?

志丈 臥龍梅へ梅見の帰りです。臥龍梅だけではもの足りないので、お宅の梅を拝見させていただくと、寄せていただきました。

よね それはそれは、ハハハ… どうぞお入りください。(下手に退場)

志丈 失礼しまーす。(新三郎と志丈、庭先に腰をおろす)

「煙草にはマッチがうまい梅の中」か。いい俳句でしたね。僕なんか「梅を褒めな、紛らわしいよ門違い」としか詠めませんよ。ハハハ。

(独り言のように) 煙草にはマッチがうまい梅の中。梅を褒めな、紛らわしいよ門違い。

志丈 ああ、さっきのお酒の残りがあるから飲みましょうよ。

新三郎 僕は入りません!(当てつけに聞こえ、堪にさわって)

志丈 (ビックリして) あっ! そう。じゃあ、一人で飲みますよ。

(ステージ裏にて)

つゆ お米さん、どなたか見えたの?

よね 志丈様です。お久しぶりに。

つゆ いただいた、美味しそうな羊羹があったわね。

よね お出します。

(お米、お茶と菓子をもって、再び登場)

よね 本当にねえ、志丈様ったら、よくいらっしゃいました。

志丈 今日は、本当はきれいな嬢様にお会いしたくなって、お邪魔しました。こちらは親友の萩原新三郎君です。

新三郎 以後お見知りおきを。

志丈 ああ、手ぶらで来てしまって、すみません。

よね い～いえ～エ。どうぞ、召し上がってくださいな。

志丈 ハハハ(頭をかきながら)、ありがとうございます。お菓子、羊羹、結構ですねエ。

よね お茶を入れてきます。ちょっと待って下さいね。(再び退場する)

志丈 この家は女二人きりでね。お菓子などは方々からもらうんですよ。食べきれずにカビが生えて捨てるんですから。食べてあげる方が親切というものです。食べましょうよ、本当に。お嬢様は綺麗なお方ですよ。

(つゆ、ステージ下手に登場)

つゆの Aria

つゆ まあ素敵な方だこと。なんて素敵な方なんでしょう。どうしてあのように素敵なお方が、私の家に来たのでしょうか。

志丈 新三郎君、お嬢様が君を見つめてますよ。梅を見ているふりをして、こっちを見ているんですよ。

つゆ 私ったら、私ったら、胸の鼓動がまらない。胸の鼓動がまらない。鳥肌もおさまらず、私ったら、どうかしているわ。どうかしているわ。(胸に手をあてて、志丈の気配を感じて退場)

志丈 あれ、お嬢様が引っ込んでしまった。

よね (入れ替わりにお米登場) お嬢様から、一献申し上げます。どうぞ。ごゆっくりなさってください。お嬢様が、志丈さんのご冗談を伺いたいと申しておりますよ。

志丈 (甲高い声で) ハハハ、これは恐縮です。(低い声で) おお、これはお吸い物、お燗の酒はまた、格別ですね。ありがとうございます。お嬢様に、こちらにお越しく下さいとお伝え下さい。お庭の梅の花も格別ですが、今日は綺麗なお嬢様にお会いしたくて伺いました。ハハハ。

よね ほほほ、そのように申したの。そしたら、お連れの方を存じ上げないから、きまりが悪いつて、それではおよしあそばせ、って申しましたの。そしたら、行ってみたいですよ。

志丈 新三郎君は僕の竹馬の友です。今日はお嬢様にお会いしたくて伺いましたので、是非こちらにお越しく下さいとお伝えください。

よね オホホホ、そうございました。今お連れ致します。少々お待ち下さい。(お米退場、お露を伴い登場する)

つゆ 志丈さん、いらっしゃいませ。(新三郎に背を向けて、下を向きながらモジモジしている)

志丈 これはお嬢様、こんにちは。ご無沙汰いたしております。今日はこんなにお持てなしを頂いて、ありがとうございます。こちらは私の竹馬の友、萩原新三郎君です。お近づきの杯を頂戴してよろしいでしょうか。

よね (新三郎に) どうぞ、おつぎします。(つゆに) お嬢様にもおつぎいたします。

志丈 おや! これは、三三九度ですね。ハハハ…。

つゆ まあ恥ずかしい。

新三郎の Aria

新三郎 (つゆを見つめる) なんて美しい人だろう。なんて美しい人だろう。この人を見つめていると、天に昇るような気持ちになってくる。なんて美しい人だろう。なんて美しい人だろう。この人を見ていると、人生に出会いのような気持ちになってくる。

つゆ・新三郎の二重唱

つゆ・新三郎 見れば見るほど素敵な方です。見れば見るほど素敵な方です。

こんなに素敵な方が、なぜ私の前に現れたのでしょうか。

志丈のアリア

志丈 (心の中でつぶやく独り言) 新三郎のやつ、いきなりお嬢様と、怪しい仲になった。初めて会ったのに。飯島様に叱られる。「責任を取れ」「そこへ直れ!」「打ち首だ!」これは危険だ。

たいそう長々お邪魔致しました。さあ、新三郎君お暇しましょう。

よね (打ち消すように) 何ですnee志丈さん!よろしいではございませんか!お連れ様もおいでですし。今夜はお泊まりなさいな。

新三郎 (間髪を入れず) 僕はいいですよ。(ゆっくりと) 泊まっても、いいですよ。

志丈 それじゃあ! 僕一人が憎まれ者になる。でも、こう言うときは憎まれ者になった方が親切かも知れない。今日は、ひと先ず、これでおさらばとしよう。

(和歌「梅の花」の旋律が静かに流れる)

新三郎 (気落ちしたように) ちょっと、お手洗いをお借りできますか。

つゆ こちらです。どうぞ。(下手に新三郎を伴う)

新三郎 ありがとうございます。(つゆに伴われて下手に退場、程なく下手隅に再び登場し)

つゆ (手拭いを新三郎にわたしながら) 新三郎様。(じっと見つめ合う二人)

新三郎 (手拭いに気づいて) ありがとうございます。

(新三郎、つゆを見つめ、手拭いの上からお露の手をしっかりと握る) そのまましばらく立ち尽くす二人)

つゆ・新三郎の和歌二重唱

梅の花いま盛りなり百鳥(ももとり)の 声の恋しき春きたるらし

(小令史田氏肥人(しょうりょうしでんじのこまひと)

(梅の花が今を盛りと咲いています。たくさん鳥の音が、恋しい春が来たと伝えていきます)

志丈 (大きな声で) 新三郎君は、どうしたのだろう。萩原君、新三郎君。さあ帰りましょう。

よね よろしいではありませんか。お嬢様のお人柄は、よくご存じですし、私が太鼓判をおします。お二人ともお堅い方ですから。

志丈 長い手洗いだな。(下手に向かって) さあ、お暇しよう。今日はごちそうになりました。

ありがとうございます。(つゆ、仕方なしに新三郎を伴ってしぶしぶ戻る)

新三郎 ごちそうになりました。ありがとうございました。

(志丈と新三郎、二人揃って大きな声で) 失礼致します。

よね さようなら。

つゆ 新三郎様、

つゆとよねの二重唱

またいらっしゃってください。また、いらっしゃってください。

つゆ お会いできないと、(無量の情念を込めて) 私は生きていけないかも知れません。

新三郎 きっと、おじゃまします。(じっと見つめ合う二人)

志丈 そうなるかな?

新三郎・志丈 さようなら。

つゆ・よね さようなら。

四重唱 さようなら。

幕